
確率少女

右腕左

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

確率少女

【Nコード】

N5806Z

【作者名】

右腕左

【あらすじ】

「佐藤君、ちょっといいかな」

昼休み。教室の一番前の席で本を読みながら座っている僕は、背後で聞こえた佐藤を呼ぶ声にひっそりと反応した。

(はい注目) pixiv重複投稿。

「佐藤君、ちょっといいかな」

昼休み。教室の一番前の席で本を読みながら座っている僕は、背後で聞こえた佐藤を呼ぶ声にひっそりと反応した。本を閉じて脇に置く。机に突っ伏して寝たふりをし、耳を鯨の鼻孔のように外に出して、背後に向けてそばだてた。

この声は恐らく皆倉みなくらのものだ。少しクセのある可愛らしい声で、聞いただけで胸がキュンとなる。容姿も声相応に可愛らしくて身体も子供のように小さい。目の前で見ると脇を掴み「たかいたかーい」と持ち上げたくなるのは、父性愛を掻き立てられるからだろ。そうでなければ些か不味い。僕はロリコンでは無いのだ。そしてロリコンでは無い上で、僕は皆倉が好きなのである。

「佐藤君？　おーい。あれ、寝てるのかな」

それにしても、皆倉が佐藤に何の用があるのだろ。佐藤は僕のような冴えない男達の間では「処女狩りの佐藤」と呼ばれ憎まれてる。顔悪し頭悪しの佐藤はなんにしるとにかく処女を狩るのだ。

それも僕達がこぞって好意を寄せるような、純粹で、清楚で、気が弱くて、細々と図書委員をやっているような美少女の処女を、何のためらいも無く狩ってしまう。万死に値する男であることは間違いないし、殺人計画が持ち上がった数は片手の指じゃ到底足りない。

百の人間を救いようやくゴキブリと並べるような佐藤に、よりもよって僕の大好きな皆倉が何の用なのか。もしかして……そう思うと僕は気がじゃなかった。

「佐藤くーん。おーい。これ以上無視すると肩とか揺らしちゃうよ？　こう見えて結構力あるんだから」

全神経を聴覚に集中させたからか、先程よりも声が近くに聞こえる。まるで耳元で囁かれているような気さえする。息遣い一つ逃すわけにはいかない。それらしい単語が出れば温めていた「佐藤殺人計画」

を実行に移さなければならぬのだから、誤解はあつてはならない。完全犯罪は確実だが人間にミスは付き物なので、十回中十回も成功するとはさすがに思えないのだ。勘違いで刑務所行きは御免被る。

「佐藤君」

今度は耳元に息がかかった！……え？　なんて事を思っている和不意に、僕の肩を誰かが掴んで上下左右不規則に揺らした。

「ためき寝入りなのは知ってるんだよ？　さっきまで普通に本読んできたもん。起きて、佐藤君」

そう言う皆倉の声は間違いなく僕の頭上から聞こえ、肩を揺さぶっているのはどうやら皆倉らしいと分かった。しかし僕は混乱した。佐藤君？　僕の名前は競原^{せいはら}で佐藤からは程遠い。何がどうなってるんだ？　突っ伏している僕をあの忌まわしき佐藤と間違えたのか？　確かに背丈は同じくらいだが髪の色が違う。むこうは西洋かぶれの金髪だぞ。日本人の心が色素と共に失っているような馬鹿丸出しの頭だぞ。間違えるはずがない。だとすると一体……考えれば考えるほど混乱した。未だ肩を揺らされているが、混乱したまま頭を上げたくは無い。もっと理知的な僕を皆倉に見せたい。しかしでも……。

不意に肩の揺さぶりが止まった。

そして皆倉は間の抜けた声で、とんでもない事を言い放つ。

「あれ、名前が違ったのかな。確率的には一番高いはずなんだけど」「馬鹿過ぎて逆に恐い！」

僕は頭を上げて声高々に叫んだ。同時に理解する。決して納得はしないがなんとか理解する。皆倉は、僕を佐藤と間違えた訳では無かった。僕に用があり僕を呼ぼうとしたけれど名前が分からず、「佐藤」と、最もそうである確率が高い「佐藤」の名で、僕を呼んだのだ。さながら生粋のギャンブラーのようにその可能性に賭けた。生き様は格好良いけれど、「ねえ」と呼ぶなり座席表を見るなり簡単な方法があつたはずだ。

皆倉は半歩あらずさりして、申し訳なさそうに言った。

「あ、ごめん！ 鈴木君だったよね。間違えちゃった」

「その溢れ出る根性はどこから！？ 今のメソッドでは僕に一生辿り着かないから！」

「冗談きついなー、ほひ村君」

「今度は村賭け！？ それにたとえ僕が村だったとしてもその濁し方は不十分だよ！ 『ほひ』以外には聞き取れない！」

僕は叫んだ。しかし思えばここは教室だ。僕の声に反応した視線を沢山感じる。注目を浴びるのは嫌いなので声を落とし、僕は続けて言った。

「名前を知らないなら無理に当てなくていいから。競原だよ……当てれそうにないだろ？」

名を名乗るのはなぜか恥ずかしい気持ちになる。理由はよく分からないが、「名乗り慣れていない」という要素は多分に含まれているのだろう。

皆倉は軽く俯き、また申し訳なさそうに呟いた。

「えっと……ごめんね？ 競原君だったよね。わたし競原君のあだ名しか知らなくて……その印象がどうしても強かったから……」

どうしても僕を知らなかった事を知られたくないらしい。

皆倉は相当な強情っ張りらしかった。まるで子供みたいだ。いや、幾らか知恵が付いてる分、子供よりも数倍たちが悪かった。けれどまあ容姿と最高に合致しているし、強がり方が余計に可愛い。少しいじめたくなる。

「ああそうなんだ。ちなみに僕のあだ名って何だったの？ 色んなところで色んな呼び方されてるからさ、自分でも把握しきれなくて、実際にはあだ名で呼ばれたことなど一度も無い。

皆倉は漫画みたくあからさまに「ギクッ」として、あれだよあれー、なんて弱弱しく言いながら回答を絞り出している様子だった。

「あのー……あれ……そう！ さすらいの——」

「そんな格好良いもんはないから！」

「えー……………っ！ 時空操作の——」

「どこの能力者！？ さっきからあだ名というより二つ名だよね？」

「せ、せり……………せりは……………セリハス！」

「凄いスマートな名前出てきた！」

皆倉は静かに俯き眉を落として、

「……………せつちゃん」

消え入るような声で呟いた。

皆倉の瞳が次第に潤い始め、これ以上問い詰めると泣いてしまいそうだったので、僕はその平凡なあだ名で落ち着く事にした。

「せつちゃんかー。それなら隣のクラスの奴らに聞いたんじゃないか？ そこではそう呼ばれてるから」

なんか今、僕すごい友達いそうな奴みたいじゃないか？ 嘘をついた罪悪感や虚しさは当然僕を蝕むけれど、得も言われぬ快感が頭の隅にあるのは確かだった。

皆倉の瞳から水分がさつと引き、頬を赤らめてにぱつと笑う。ああ可愛いと僕は素直に思った。

「そうそうそうそう！ そうなの！」

皆倉は少し大袈裟にくくく頷き、早口で言った。

よし、これで皆倉の虚栄心は満たされたし僕は可愛い皆倉を見れてお腹いっぱいだし大団円だ！ と思ったが直ぐにふわりと疑問が浮かんた。そもそも、皆倉は僕に何の用だったのだろう。僕は疑問を口にした。

「それで皆倉。なに？」

しまった。なんだか不機嫌そうに話してしまった。「なに？」ってなんだよ。何様だよ僕。

「え、なにってなに？ どうしたのせつちゃん」

とんでもない馴れ馴れしさだった。

でもまあそれは嬉しさの方が強かったのでそつとしておいて、僕は自分の質問の非を認め、もう一度言い直した。

「僕になにか用があるんだよね？」

不機嫌エツセンスは未だに抜け切れていなかった。「正直迷惑です」とでも続きそうな声色。こういうところが友達の少ない要素の一つだと分かっているのだけど、意識して治せるのなら苦労はしない。

「あ、そうだった。わたしせつちゃんに用があるんだよ。そうじゃなきゃ話しかけたりしないもんね」

悪気は無いんだろうけど最短距離で傷付いた。まるで定規で引いたかのような直球ストレート。けれど、皆倉の言っている事はまぎれも無い事実なのだった。僕としては皆倉と永遠に話せない確信があったし、皆倉の方はそもそも僕を知らなかったのだから前提からして成り立たないのだ。

だがそれを踏まえ、改めて同じ疑問が浮かんた。そんな風に無関係な関係の僕に、皆倉が何の用なのだろうか。心当たりは一つたりとも無かった。

皆倉は静かに、それでも滑舌良くはつきりと話し始める。僕はそれを黙って聞いた。

「わたし今生徒会役員をやってるんだけど」

話の入りから早々訳が分からなかった。皆倉が生徒会役員なのは当然知っているけれど、それが僕と何の関係があるのだろうか。生徒会と僕の間には綿毛ほどの繋がりも無い。

「後期の生徒会長に立候補しようと思ってるんだよ」

これは驚きだった。皆倉から生徒会長までは天竺よりも距離があるように思われたからだ。イメージが程遠いにも程がある。

そしてここに来て皆倉の話と僕との距離が大幅に開き、そもそも同じ世界に存在出来ているのかも不明になった。ただの独り語りなんじゃないかとさえ思える。

「でもね、生徒会長になれたとしても、後輩がわたしの言う事聞いてくれないと思うの」

そりゃそうじゃ。僕はオーキド博士風に思う。皆倉が生徒会でマスコット機能以外の何もかもを、十分に果たせていない姿がありあ

りと目に見えた。しかし話は依然として見えない。

「そこでわたし考えたんだよ。そうだ、頭が良さそうな人を傍らに置こうって。出来そうな人の隣にいればわたしも何だか出来そうでしょ？ それに、わたしの言う事はその人が言う事だと認識してくれるかもしれないからね」

皆倉はそう言い終り、一息置いて続けて言った。目には強い光が宿っている。

「そんな訳でせっちゃんには副会長になって欲しいんだよ！」

「なんでそうなるうー？」

疑問形が強過ぎて語尾がもう上がり上がる。ともすれば人文字ではてなの形にでも成ってしまいそうだった。

「え？ なんてってだから、頭の良さそうな人を傍らに——」

「それがなんで僕！？ けして質の良い脳味噌は入ってないから！ というか僕の事知らないのになんで分かるんだよ！」

半ば叱責するような形で僕は言った。思ったより声を張ってしまった周りの視線をそれとなく感じるけれど、そんなもの今はどうでもよかった。現在の小さな注目よりも、後の大きな注目を排除しなければならぬのだ。

皆倉は言い諭すように言う。

「頭の『良さそう』な人だよ？ だから中身はどうだっていいんだよ。わたしにはせっちゃんが物凄く出来そうな、頭の良さそうな人に見える。そんな雰囲気かもわもわ噴き出してるんだよ。それに昼休みでも難しそうに読書をしている人は頭が良いに決まってるんだから、せっちゃんも頭が良いんだよね？ 本を読んでいるせっちゃんの姿を見て、わたしは衝動的に決めちゃったんだから」

僕はさっきまで読んでいた手元の本を鷲掴みにし、豪速球で鞆の中に叩き込んだ。さすがに読んでいた本がライトノベルだとは知られたくない。難しそうな顔の内で萌え萌えしていたとは絶対に知られたくない。でもまあ、本を読んでいたら頭が良さそうに見える。という考えには共感できるものがあつた。ただでさえこの学校の偏

差値は雀の涙とまではいかないまでもせいぜい象の涙程度なのだから、本を読んでいる人はなかなかいない。それによって読書家はさらに光って見えるのだ。

それでもさすがに、皆倉のそれは衝動的に過ぎると思うけれど、名前も確認しないってどんなだよ。

だが皆倉には悪いけれど、僕はこの話を断る。

僕が副会長なんてありえないのだ。なんでわざわざ注目や責任の鎖を自分に巻き付けなくてはならないのか。そんなものにがんじがらめは正直耐えられない。確かに、愛しの皆倉との仕事というのは魅力的だ。「傍ら」なんて響きは魅力的過ぎて身体が捻じれる。でも、結局僕は『良さそう』なだけである。それは頭が良いと同義ではない。自分でも痛いほど分かっているのだ。皆倉の言い方では隣でずっと難しそうな顔をしていれば良いみたいだけれど、そんな話は絶対にありえない。ここはあくまで教育機関。副会長は重要な役割で仕事も沢山あるのだ。ゆえに皆倉に醜態をさらしてしまうのは必須で、それは決して益とは言えない。

僕は少し暗い声音で、ゆっくりと話した。

「ごめん皆倉。気持ちは嬉しいんだけど、僕は副会長にはなれない……」

「そっかー、ならギャンブルで決めるしかないね」
「なんで!？」

皆倉の言葉には純度の高い疑問しか浮かばなかった。僕の脳領域がはてなで埋まる。

「それじゃあ二枚のコインを投げて両方同じ面。つまり表同士裏同士ならせっちゃんの勝ちで、表裏、裏表、違う面だった場合はわたしの勝ちだよ。これなら確率は平等でしょ？」

そう言いながら皆倉はポケットをまさぐる。僕は混乱して話に追いつけなかった。というかそもそも追う方向が分からなかった。しかし皆倉は困ったような顔になり、ポケットから手を出す。

「今コイン無いんだった……。あ、それじゃあ鉛筆持ってる？ そ

れでも同じこと出来るから」

小銭なら持つてるけど、とか、美術で使うから鉛筆はいっぱいあるけど、とか思ってたけれど声には出なかった。それでも皆倉は遠慮なく僕の筆箱を開け、鉛筆を四本取り出し、そのうちの二本の尻をちよこちよこ前歯で噛み始める。リスみたいで可愛いと思ったけれどさすがにこれは見過ごせなかった。

「人の鉛筆なに食べてんの!？」

皆倉は鉛筆を口から離した。鉛筆の尻には歯型が付き、皆倉の甘い唾液で微かに光っている。鉛筆の尻にここまで目を奪われたのは初めてだった。

「ごめんねせつちゃん、他の二本と区別したかったの」

他にも方法は五万とありそうだけれど僕は納得した。

「後でわたしのと取り換え——」

「それはやめて」

皆倉が言い終わる前に僕は言った。その鉛筆は喉から多関節口ボツトアームが出るほど欲しかったのだ。

「あ……わかった。えと、それじゃあさつきと同じ要領で、二本引いて噛み跡同士、綺麗同士ならせつちゃんの勝ちで、違うもの同士ならわたしの勝ちね」

そう言い皆倉は尻の方を隠して鉛筆をまとめ持ち、僕に差し出す。僕はさつきよりも幾分混乱が解けていて、この状況をきちんと「おかしい」と認識できた。

「あの、皆倉」

「なにかな？」

「ちなみに聞くけど、このギャンブルは何が賭かってるの」

「わたしが勝てば、せつちゃんが副会長になるんだよ」

聞き捨てならなかったが続けて聞く。

「……僕が勝てば？」

皆倉ははっと驚いた顔する。丁寧に「はっ」と声にも出す。どうやら僕が勝った場合は考えていなかったらしい。初邂逅時からギヤ

ンブラーっぽいのに肝心な所が抜けてるよな。お互いが釣り合わなければ賭けは成り立たないのだ。

悩むようにうーんと唸り、皆倉は突然はじけるように言った。

「十万！」

「釣り合うんだろうけどなんか嫌！」

どんなやり取りでも、現金が入るだけで急激に温度が下がる。皆倉との冷たいやり取りは嫌だった。でも……と、僕は考え直した。高校生の十万と言えば超が付く大金である。そんな大金を、賭けの片方に据えるほど、皆倉は僕を必要としているのか。そんなにも僕が隣にいて欲しいのか。

そう思い至ると、胸が陽だまりのように暖かくなった。

この賭けぐらいいは乗ってやってもいいんじゃないのか？ どうせ確率は半々だ。負けてしまった時はまあ、皆倉のために全身全霊頑張るのも今となってはやぶさかではないし、勝ってしまったても十万は断ればいい。

「わかった。乗るよ、その賭け」

僕は言った。

「ほんと！？ それじゃあせつちゃん、二本同時に引いて！」

皆倉は四本の鉛筆を僕に向ける。鉛筆は削つてあるが長さも大して変わらず、見分けは殆どつかない。少なくとも噛んだ鉛筆はもう分からなくなっていた。どうせ考えても仕方がないと僕は目をつむり、偶然に任せて選ぶ事にした。視界に残った残像を頼りに鉛筆へと手を伸ばす。ふにりと、鉛筆の下の柔らかい何かに手が当たった。皆倉の手だ。刹那的に暴れる心臓をなだめすかし、僕は片手で器用に、二本の鉛筆を掴んだ。そして、一気に引きぬく。

なぜだか周りが静まり返った気がした。当然そんな事はいえなけれど、僕と周りとの間に厚い壁が現れたかのような、そんな感じ。僕はゆっくりと、薄く目を開け始めた。

「やったあー！」

皆倉の歓喜の声が聞こえた。その声を皮切りに僕は目を見開き、

鉛筆を確認する。

噛み跡は、一つしかなかった。

つまり、僕の負けである。

「これってわたしの勝ちだよね！？ そうだよな？ やったあ！」
皆倉はとりあえず大きな大会に優勝したかのような喜びようである。両手を上げて喜ぶ人を初めて見た。そして、負けてしまったけれど、僕も嬉しくなった。僕を獲得したことで皆倉がこんなにも喜んでいなのだ。嬉しいに決まっている。確かに責任や注目を引き受けるのは気が進まない。だが、だが僕、自分を客観的に見てみる。前の僕なら殴り殺したくなる程の青春をしていないか？ 好きな人と生徒会。なんだこれ羨まし過ぎる。羨まし過ぎるぞ僕！

「まあ、勝負だからしかたないよな！ 副会長になるよ！」
リズムに乗せて話しそうになるほど、心がわくわくと弾んだ。

僕の言葉を聞いてさらに喜んでいいる皆倉を見ると、幸せな気持ち
が津波のように押し寄せてくる。

「ありがとうせっちゃん！ それじゃあ今から生徒会顧問に言いに行くから、読書の続きでもしといてね！」

そう言って皆倉は大きく手を振り、教室から元気に出て行った。

「ああ、なにかが始まるなあ」

僕はしみじみ呟く。人生の歯車が全て噛み合い、力強く動き出している
と確信した。この世界の主人公はもしかして僕なんじゃないのか？
あまりにも月並み過ぎる幼児的万能感だけれど、なぜだか自信を持ってそう言える。

皆倉に言われた通り本の続きを読もうとしたけれど、急にそれが馬鹿馬鹿しくなった。ライトノベル？ そんな虚構はもういらない。
僕には輝かしい現実がある。萌えなら何よりも素晴らしいものがある。
隣にある。これが本物の薔薇色だ。インクや文字で造られた薔薇色とは
比べ物にならない！

僕はにやけた。ただただにやけた。そして机に置かれた四本の鉛筆
を手取る。乾いた木がぶつかるからからとした音に耳を傾け、

ゆつくりと瞼を下ろした。これから起こるだろう色彩豊かな未来に、漠然とした期待を膨らませながら。

おわり。という文字がデーンと浮かびそうなほどの大団円だ、と今度こそ思った時、背骨を鉄やすりでおろされているかのような、強烈な寒気が僕を襲った。

あれ。

僕は急いで目を開けて、手に持った鉛筆を見た。

何の変哲もない四Bの鉛筆で、二つには歯型があり、他の二つには何もなく綺麗である。どこにもおかしな所はない。でも、どこか違和感があった。寒気が依然として消えないのだ。

あ。

そうか。

そうなんだ。

さっきの賭け。

「イカサマじゃないか」

僕を纏う薔薇の花が少し、枯れ始めているような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5806z/>

確率少女

2011年12月19日13時57分発行